

中国の大学事情について

梁 焜 （東北大学情報科学研究科）

私は1994年に来日するまで、大学時代の4年間を含め、18年間中国で過ごし、教育を受けた。また、その後も研究集会や帰省のために時々中国に帰っている。これらの経験に基づき、私が感じている中国の大学事情について述べたいと思う。

1. 変化

私が来日した1994年当時は、中国は改革が進んでいたとはいえ、大学にはその手がまだ殆ど入り込んでいなかった。教員たちの生活や考え方には、それ以前とは殆ど変化がなかった。大学に入るのはそんなに簡単なことではなかったが、大学卒であるだけで、就職にはあまり困らなかった。就職はある程度自分で探さなくてはいけなかったものの、社会全体でも資格という概念が殆どなかったので、大学生たちは講義内容だけきちんと勉強し、よい成績を取ればよかった。また、教員たちは大体大学キャンパス内に住んでいて、講義の時間割も日本とは大分異なり、夏学期だと、昼休みは11:40-14:00と2時間以上もあった。つまり、皆のんびりといっていよいよよいような大学生活を送っていたのである。

しかし、今の状況はまったく違う。学生たちは入学すると同時に、数年後の就職のために、どんな資格が最も役に立つかを考え、色々な資格を取る。キャンパス内に住んでいる教員数はどんどん減り、講義の昼休み時間も日本と同じく一時間になった。

なぜこんな変化が起きたのであろう？その最大の理由は、この数年間で、大学の入学者数が劇的に増加しているからである。

2. 卒業者数が入学者数の半分だけ？

次の表は、中国教育部（日本の文部科学省に相当）が発行した『2004年教育年鑑』（参考文献[1]）から抜粋した、2003年における四年制大学の新生者数、在学学生数及び卒業生数である。

表1 中国の2003年の四年制大学入学者数と卒業者数

	新生者数	卒業生数	在学学生数
理学	220,157	103,409	723,579
各分野の合計	1,825,262	929,598	6,292,089

この表をみると、中国の大学では入学者数が卒業生数のおよそ二倍であるように見える。これだけ見ると、中国の大学では、入学者の半分ぐらいしか卒業できない、それだけ卒業するのが難しい、と結論付けてしまうかもしれない。しかし、この結論は間違っている！卒業できる割合を計算するには、今の卒業生たちが入学した四年前の新入学者数を使わなければいけない。入学者数があまり変わっていないならば今の新入学者数を近似的に使ってもいいが、ここ数年間の中国の変化は、この仮定を満たさない。

3. 「拡招」—入学者数の増加

中国では1999年以来、中国教育部の政策により、「拡招」（「拡大招生」の略語、大学の入学者数を増やすという意味）といい、各大学は毎年の新入生者数を急速に増やしている。下表は中国教育部の『中国教育年鑑』（参考文献[1]）及び『全国教育事業発展統計公報』（参考文献[2]）による、中国の1998年—2005年の入学者数に基づくものである。

表2 中国の1997—2005年の新入生者数（単位：万人）

	四年制＋ 短大（A）	四年制 （B）	Aの前年 比増加数	Bの前年 比増加数	Aの前年 比増加幅	Bの前年 比増加幅
1998	108.36	65.31				
1999	154.86	93.67	46.50	28.36	42.91%	43.42%
2000	220.61	116.02	65.75	22.35	42.46%	23.86%
2001	268.28	138.18	47.67	22.16	21.61%	19.10%
2002	320.50	158.79	52.22	20.61	19.46%	14.92%
2003	382.17	182.53	61.67	23.74	19.24%	14.95%
2004	447.34	209.91	65.17	27.38	17.05%	15.00%
2005	504.46	-----	57.12	-----	12.77%	-----

（小数点以下三位 四捨五入）

この表から分かるように、中国の大学（短大を含む、以下同様）の1998年の新入生者数は約108万人でしかなかったのに、1999年は一年間だけでおよそ47%の増加幅で約155万人になった。その後も毎年平均21.75%の増加幅で、2005年ではすでに約504万人になり、7年間で実に4.66倍にもなった。

ただし、注意したいのは、この「拡招」は大学だけであり、下表（[2]による）から分かるように、中学校と高校に関しては、進学率は増えてはいるが、それほど変わっていない、ということだ。

表3 中国の1998-2003年の小、中、高卒の進学率

	小卒の進学率	中卒の進学率	高卒の進学率
1998	94.3%	50.7%	46.1%
1999	94.4%	50.0%	63.8%
2000	94.9%	51.2%	73.2%
2001	95.5%	52.9%	78.8%
2002	97.0%	58.3%	83.5%
2003	97.9%	59.6%	83.4%

4. 「拡招」の問題点

これだけ急速に入学人数が増え続けると、色々な問題点が生じるのは否めない。例えば、

- ・ 学生の質の低下
- ・ 卒業生の就職難
- ・ 教室等校舎の不足
- ・ 教員の不足

等が挙げられる。一番目の「学生の質の低下」に関しては、多くの公立中学校や高校の教職ですら、公募条件がすでに「大学卒」ではなく、「一流大学卒」になっていることから推して知るべしである。また、前述の「教員のキャンパス外への引越し」と「昼休みの短縮」は、三番目の「校舎の不足」に由来するものである。

ここでは特に深刻な問題点と思われる、大学教員の不足について詳しく説明したいと思う。下表は[2]から抜き出した、1998年-2005年の、大学の専任教員数及び教員一人あたりの学生数である。

表4 中国の1998-2005年の大学教員数

	専任教員数(万人)	前年比(万人)	学生数：教員数
1998	40.72	0.27	11.6
1999	42.57	1.85	13.4
2000	46.28	3.71	16.3
2001	53.19	6.91	18.2
2002	61.84	8.65	19.0
2003	72.47	10.63	17.0
2004	85.84	13.37	16.2
2005	96.58	10.74	16.9

(ただし、学生数は院生、留学生、通信教育学生等の人数を一定の公式により合計した数である)

この表から分かるように、1998年から2005年の7年間で、中国では、大学の専任教員の数は約41万人から約97万人へと倍以上も増えたが、それでも学生数の増加には追いつかず、教員一人当たりの学生数は1998年の11.6人から、2005年は16.9人にまで増えてしまった。

勿論、この「拡招」のおかげで、よかったこともある。それはアカデミーポジションへの就職が容易になったことだ。次の表は[2]から抜粋した、2001—2005年の中国の修士課程（中国では多くの場合は3年間である）、博士課程の入学数と卒業数及び大学教員の増加数である。

表5 中国の2001—2005年の大学院学生数及び教員数の増加（単位：万人）

	修士入学	博士入学	修士卒	博士卒	大学教員増
2001	13.31	3.21	5.49	1.29	6.91
2002	16.43	3.83	6.62	1.46	8.65
2003	22.02	4.87	9.23	1.88	10.63
2004	27.30	5.33	12.73	2.35	13.37
2005	31.00	5.48	16.20	2.77	10.74

この表の修士卒と博士卒の人数に比べ、大学教員の増加数の多さに注目してほしい。大学教員の増加数は、2001年と2002年は、修士卒と博士卒の合計よりも多かった。2003年以降は、合計よりはやや少なくなったが、博士課程の卒業数よりは依然として遥かに多かった。海外で博士号を取った帰国組もいるが、それにしても差は大きい。これで、アカデミーポジションへの就職を希望する博士課程卒業生が職探しに困らないのも当然であろう。

5. まとめ

以上のように、中国では1999年以来、「拡招」（大学入学数増加）が実施されてきた。これにより、大学入学難がだいぶ改善されたが、色々な問題点も同時に現れた。一方、この数年間の博士卒業生たちはこの「恩恵」を受け、就職には困らなくなった。

これだけ急速な拡大が長期間にわたって続けられるはずはないが、これにより引き起こされたさまざまな問題がこれからどう解決されるか、注目していきたい。

参考文献

1. 中国教育部発行 『中国教育年鑑』2001年版—2004年版
2. 中国教育部発行 『全国教育事業発展統計公報』1998年版—2005年版